

「Better Eyesight・1923年4月号から」

「An Opportunity for Teachers」

「先生には教えるチャンスがある」

この国の将来は子ども達が担う。子ども達は先生方に指導されている。両親が子どもたちと過ごす時間は相対的に短くなっていて、時には全然なくなっている。一方で先生方は一日に少なくとも6時間は子ども達の生活を監督している。近年は先生方の任務がととも増加している。子どもの教育を出来るだけ家でしていた時代もあった。しかし今日では子どもに十分な食べる物を与えられない家もある、そして先生が食べ物、部屋の暖房、暖かい衣服、新鮮な空気、運動、楽しいゲーム等を供給している。先生方は生活に必須な条件を満たすだけでなく、子ども達に必要な娯楽までも考慮に入れてくれることに私達は大いに感謝すべきである。

私は、学童の目に関心がある。年少児にメガネを掛けさせて置くのは犯罪に等しいのだと思う。学齢まえの子ども、時には乳児にさえメガネを掛けさせている。私もメガネの処方出来ることを誇りに思った時があった。他の医師に処方の方法を教えたこともあったが、幼児には絶対にメガネは掛けさせなかった。何故ならば、6歳以下の子供はメガネを掛けても、それで明らかに目が良くなったとは云えなかったからである。

最近、ある先生の話したことは、ニューヨーク市の健康委員会が学校の目の検診に派遣した医師が、メガネが必要と思われた子ども達全員にメガネを処方し、その先生もメガネを掛けるべきだと主張した。その先生に私は、何をすべきかを教えたので彼女は、すぐにメガネを掛けないで、不快感のない目の使い方が出来るようになった。

受け持ちの子ども達が次々にメガネを紛失したから、彼女はメガネを掛けなくなった子ども達1人ずつに、どうすれば目が良くなるかを教えた。そして遂に全員がメガネなしで完全に見える目になった。その上に、彼女のクラスの学業成績が大幅に上がった。中心視を練習したことによってクラスの子供達は、黒板を見たり本を読んだりしても頭痛が全然起きなくなった。先生がしたことは絶対に悪いことではなく、アメリカ中の他の先生達も彼女と同じことが出来る。

今、メガネを掛ける子どもは確実に増えている。私の診療所にメガネを掛けた大勢の子ども達が連れて来られる。色々な症状を治してメガネを要らなくするためである。そして私の気付いたことは、大多数の子ども達のメガネは非常に弱く実際には必要のないケースなのである。少し休む、パーミング、スウィングング等を行うことによって視覚が正常に戻り、メガネなしで完全に快適になるのである。

私立学校勤務でも公立学校勤務でも先生方の全員が、教え子たちの為に常識的であるが簡単、有益で偉大なことを、率先して出来る機会がある。貧しい地域の人々はメガネの購入費、検眼医に払う費用等を両親が払う余裕がない場合にメガネが必要だと思った先生が負担した例を私は知っている。

私の本を読んで私の方法を実施した先生の一人一人が、欠陥のある生徒の目を治すことが出来る。例外も勿論あるだろう。しかし私が見付けたことは、学校への道を見て来ることが出来る生徒ならば、先生はその子の目を治す手段を知っている。時々私は生徒たちが目を悪くしない為の記事を書く、そして先生達がメガネなしで正常に見えるように治療をする。いつも私が先生達にお願いすることは生徒達の目に良いことをすることである、そして多くの先生達は生徒の目を治してくれた。けれども先生達の中には治すための確信と勇気が充分でなく躊躇する。そう云う先生達が見える力の恩恵を、生徒に進んで与えるような言葉を何とか見つけて告げたいと私は望んでいる。

先生達が頭痛に悩まされている子に、目を閉じてパーミングをさせても子どもに害を与える筈がない。子どもは、目を閉じてパーミングをすることで頭痛が治まる。アイ・スペシャリストは勿論のこと、常識のある人ならば子どもが目を休ませることに反対をする筈がない。勉強を数分間、休むことは罪悪ではない、そして大概の先生はその子がどのくらい休んだらいいか、誰よりもよく理解している。

毎日、生徒たちが診療所へ来るのでメガネを外しなさいと私は云う。私の治療法を練習することが許された時には、生徒たちはメガネなしで良い目になる。これからの一生メガネを掛けるのだと決めつけられるよりは格段に良いと私は思う。生理的光学の分野で私の発見した諸々のことは、メガネを掛けている子ども達全員が、メガネの要らない目に治ることの可能性を証明したのである。